

A・M・ホカート『王権』“Kingship”Oxford University Press,1927 橋本和也訳

その 2

第6章 神饌

神饌とは、“神祇に供する酒食”の意味だが、ギリシア人はそれを「アムブロジア」と呼んだ。これは、ポリネシアでは「カヴァ」、インドでは「ソマ」と呼び、不死を獲得するのに「ソマ」の効力は非常に有力で、「アマリタ」即ち“不死のもの”または“不死”と呼ばれる。「カヴァ」、「ソマ」は共に儀礼的飲み物である。「ソマ」は、事実、ヴェーダ儀礼で最も重要な供犠の一つであった。カヴァ儀礼は、首長の即位式の主要な要素でフィジー語で「即位すること」はカヴァを「飲むこと」と表現される。儀礼におけるカヴァの機能は明確で、カヴァは人間に神を運び入れ、神と人間を一体化する。ソマの吸引者は、精神的に天に昇っていき、神々の間に自分の場所を占める、即ち不死になる。ソマの機能も同じ様に人間を神にするのである。「アムブロジア」は「アマリタ」と同じ語で、“不死”を意味する。これがインドと同じように純粹に儀礼的な意味で使われていたかは疑問だが、記憶はしていたようだ。しかし、アリストテレスのような偉大な哲学者にとって「不死」とは本質的に滅ぼすことが出来ないものを指すと疑問を呈するが、彼らの考えは遠い先祖のものとは違い後世の観念からのもので、「祖先たちは人間が、死と老齡の攻撃に対して奮起し、死後も存在が確実に続くようになることを目的にしていた。不死とは死を寄せ付けないことであり、アムブロジアを飲むことで達成されるものであった。それは王が神であった時代に行なわれており、そのとき、神々はアムブロジアを飲んでいたのである」と指摘し、伝統は正しく、合理主義者は間違っていたと述べる。そして同じようなことが今日のキリスト教のなかにも見られると続ける。もし我々が古代の宗教を理解しようとするなら、まず現代の宗教が持つ綱領を糸口に、両者に共通する特徴に注意し、古代の宗教の歴史的な延長線上にあることを認め、古代人に特有な信仰を探求しなければならないと述べる。今日では、我々は神の、供犠として捧げられたキリストの、肉体と血において聖餐を受ける。「神よ、祝福され、受け入れて貰うべきものすべての中で、我らは汝にどんな聖餐を懇願すべきか。それは我らにとっては、汝の、最愛なる神の子イエス・キリスト、我らが主の肉体と血である」。ここで注意すべきは、神が王の如く「主よ」と呼びかけられていることである。神は殺されるべき生贄である。「血・・・信仰の神秘が、罪を除くために、汝ら多くの者たちの上にこぼされる」。犠牲は、死んではいるが、死んでいず、再び起き上がり、永遠の生を生きるのである。「永遠に生き、支配する」。再び、ここに王権に関する観念があることに注意すべきである。不死である犠牲が、不死を授ける。そしてミサの秘法性について、また聖餐を前にした訓戒を述べ、ソマ儀礼における如く、神と聖餐を受ける

者とは、別の意味においてではあるが一体となる。しかし、一神教であるキリスト教徒にとって、聖餐を受ける者はキリストと一体になれるかも知れないが、キリストそのものにはなれないといった論理的結論は引き出せない。何故か？それは神秘が論理に取って代わられているからで、この点が現代の我々と聖餐式の創始者との大きな違いであり、容赦のない理論家が彼ら創始者であり、感情的で非論理的なのが現代の我々なのであると述べる。教会は自らの正統化のため、「信仰の神秘性」に敵対するゆえに、その論理的結論まで突き詰めることはしない。ヴェーダとキリスト教との違いは原始的なものど進歩したものとの違いでも、古代と現代との違いでもなく、一つの信仰体系の始めと終わりの違いなのであると慨嘆し、現在のキリスト教がどんな段階に到達しているのかを、偏見を棄て、叡智をもって判定するには、我々はあまりに無知で私心に捕らわれ過ぎているのである、と結ぶ。

第7章 戴冠式 (ヨーロッパ諸国の国王・皇帝が即位の後、公式に王冠を受け、即位したことを広く示す儀式)

戴冠式は王権と密接な関係を持つ。それは数多くの儀礼と慣習からなっている。

この言語以外の人間精神の創造物を取り扱うのに、比較言語学者が行なった方法を試みてみようとしたのが、この章である。式次第をAからZまでの26の要素に分解し、それぞれの地域での事例を当て嵌め分析している。少し冗長だがこの式次第を記述しておこう。

- A 理論では、王は(1)死に、(2)再生する、(3)神として。
- B 準備段階として、王は断食し、他の禁欲生活を実践する。
- C (1)供犠に参加資格のない、余所者、罪人、女子供は近づけず、何も知らされない。
(2)武器を持った護衛が覗き見を防ぐ。
- D 一種の安息日が守られる。人々は臨終のときのように沈黙し、静かにしている。
- E 王は儀礼的な戦いをせねばならぬ。(1)武器によって、または(2)儀礼によって戦い、
(3)勝者として出現する。
- F 王は、(1)正しく統治するように戒められ、(2)彼はそうすることを約束する。
- G 王は一種か二種類の聖餐を受ける。
- H 人々は、ある瞬間に、(1)わいせつな行為か、(2)悪ふざけを思うままに行なう。
- I 王は特別な服をまといされる。
- J 水で洗礼を受け、
- K そして、塗油式を受ける。
- L そのときには、ある人間が犠牲として殺される。
- M 人々は騒音と歓呼の声をあげて喜び、
- N 饗宴が催される。
- O 王に王冠がかぶされる。

- P 靴を履き、
- Q 他にも王位の徴となる、剣、笏、指輪等を受け取る。
- R そして、王座に坐る。
- S 王は、太陽が登るのを真似て、儀礼的に三步進む。
- T 最後に、自分の住居を回り、臣下から忠誠の誓いを受ける。
- U 王は新しい名を受ける。
- V 女王が、王と共に聖別される。
- W 臣下か役人が、戴冠式のときか王の巡察の間に、聖別される。
- X 儀礼に参加した人々は、神々の如く、ときには仮面をつけて、正装する。
- Y 仮面は動物のもので、被り手とその動物が同一視されている。
- Z 王は数回聖別される。その度に王権の階段を、一步ずつ登っていく。

VとWの項目はこの章では扱わない。それぞれ一章ずつ用意する。XとYは、仁シェーションの章において論ずるのが適当であろう。と述べ、フィジー、インド、カボジア、エジプト、ヘブライ、ローマの凱旋行進、神聖ローマ帝国、アビシニア、現在の西洋（各地一括）の儀礼を分析する。一例をあげると、フィジーの首長の聖職授任式は首長の葬送儀式とほとんど共通している。それは両者が、死という同じ主題に基づいて組み立てられており、一方は現実の死であり、他方は架空の死である。フィジーの即位式の式次第は、神が樹皮布に包まれて首長の所に運ばれる。神は、カヴァの形をとって首長の体内に入れられる。首長の古い自我は死に、神がそれに代わる。新しい人格は、新生児の如く養育され、その身体から子宮の穢れを洗い流すために水で洗われる。その主要な点を、該当するA～Zで示している。同様に・・・各地儀礼の項目内の内容には多少の差異はあるが、ホカートは以下のように分析している。

フィジー	インド	カボジア	エジプト	ヘブライ	ローマの凱旋	神聖ローマ帝国	アビシニア	現在の西洋	
A	A	A	A	A	A	A	—	A	8/9
—	B	—	—	—	—	—	—	B	2/9
C	C	—	—	—	—	—	—	C	3/9
D	—	—	—	—	—	—	—	D	2/9
E	E	E	E	—	E	E	E	—	7/9
F	F	F	—	F	—	F	—	F	6/9
G	G	G	—	—	G	G	G	G	7/9
H	—	—	—	—	H	—	—	—	2/9
I	I	I	I	—	I	I	I	I	8/9
J	J	J	J	—	—	—	—	—	4/9
—	K	K	K	K	—	K	—	K	6/9

L	L	—	L	—	L	L	—	—	5/9
M	—	M	—	M	M	—	—	M	5/9
N	—	N	N	—	N	—	—	N	5/9
O	O	O	O	O	O	O	O	O	9/9
—	P	P	P	—	P	P	—	P	6/9
Q	Q	Q	Q	—	Q	Q	Q	Q	8/9
—	R	R	R	R	R	R	—	R	7/9
—	S	—	—	—	—	—	—	—	1/9
T	T	T	T	—	T	—	—	—	5/9
U	U	—	U	—	U	—	—	—	4/9
Z	Z	—	U	—	Z	—	—	—	4/9

(XY)

17/22	18/22	14/22	14/22	6/22	15/22	11/22	5/22	14/22
-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------

以上が、一つの共通の源から、検証してきた戴冠式のあらゆる儀礼が派生したと考えて、暫定的ではあるが、儀礼の祖型を仮定した我々の試みを正当化するに十分な証拠を提示したと考える。とする一方で、この試みは未だ不十分であるがきっと将来は完成されるだろうと確信していると述べる。この分析の結果、その儀礼はインドに一番よく残っておりその残存形態がフィジー等で見受けられるように思えると述べ、儀礼はおおまかに・・・準備（再生と思う）・勝利・訓戒と誓約・（着衣・聖餐、これは順序が逆と思う）・塗油式・王冠の授与・行列に分けることが出来るとする。そして、ヴェーダの儀礼がアリアン人と共にインドにやって来たことを考えれば、東洋の境界をイランか、もっと西方に動かさねばならないし、はっきりとはしないが、その地域が聖職授任式の発生の地の可能性がある。果たしてこの我々の現在の研究が他の研究者の刺激となって、より離れた他の形態を探し出して、この研究の基礎を広げることを望めるであろうか、とこの章を結ぶ。

第8章 結婚式

この章は、前章で別に章を用意するとされる **V**（女王が、王と共に聖別される）の項目である。まずその理由について述べている。

ここで扱っている国々における結婚式の最も顕著な特徴は、花嫁と花婿に国王のような地位が与えられることで、それはどんな階級の者にも適応される。インドではバラモン以外の再生すべきカストでも、更には低位カストでも、花婿は神ではなく王と見なされる。

しかしどの地域においても下位階級にまで普及していた訳ではなく、セイロンでは上位階級には様々な結婚式はあるが、一般の村人には結婚式というものがまったく無いし、フィジーとサモアの間にあるワリス島では結婚式というものを見出せなかった。しかし、何故、王に対する名誉が花嫁と花婿に向けられたのか？それは、ここで扱っている国々において

結婚が国王の儀礼に起源を持っているという説明が最も適切である。では、どんな機会に王と女王はこの儀礼を行なうのか？注意すべきことは、**国王の結婚は常に彼の聖職授任式と関連している**。国王は、授任式の期間中に、妻と一緒になければ再生を達成することは出来ない。配偶者なしでは彼は完全にはならない。そこで、戴冠式の図式の中に項目Vを加えることとなるのであると、説明する。そしてその事例として、マライ人、インド人、古代ギリシア、ローマ、ロシア、セイロン、古代インド、10世紀のビザンチン、9世紀のフランス、フィジーほか様々な事例を列挙するが、未だ国王は配偶者なしには不完全であるという説明では、究極的な解明に到達したとは思えないといい、先の方法論を試みる。サタパタから王の戴冠式中での女王に関する一節を取り上げ、

女王：王＝大地：神々

王＝神

∴女王＝大地

また別の節から、

女王＝マヒシー

大地＝マヒシー

∴女王＝大地

の等式を導き出す。

この同一性は、プラヴァルグヤの供犠儀礼での、大地に触れる儀礼によって更に確かめられると言う。プラヴァルグヤ儀礼における大地は、王の戴冠式における女王の代わりを務め、ここでは人間を代理にすることなしに、直接配偶者として王に結びついているといい、更に、インド人の思考は進展し、男性が天であり、女性が大地であるとの考えに至った。一方では、マハーバーラタに述べられているが、チベットの芸術においては特に好まれ、

王＝神＝エーテル＝精神＝魂

女王＝女神＝大地＝物質＝肉体 という結果になるが、しかしこれは

後の時代の思考に属するとし、もし通常の結婚式が、戴冠式の儀礼から結婚の部分だけを庶民用に抽出されて単純化されたものであったら、男が空であり、女が大地であるという同じ理論が潜んでいるのが見られるであろうし、少なくとも戴冠式儀礼の幾つかの部分を見出すであろうと、マレイの例 (E、J)、インドの儀礼 (A、B、E、I、J、K、N、S)、ドイツの事例をあげている。結婚式が国王の戴冠式に類似していることは、キリスト教徒も承知しており、「戴冠式に最も近い教会の儀礼は結婚式である。結婚式では、両者の近親者の間で、誓いと共に、盟約が結ばれる。こうしてなされた盟約に、教会が祝福を与える。祝福を与えるとき、教会は結婚をする両者の近親者に対して、いわば、両者の間に結ばれた盟約を表象するために冠と指輪を使う。」と R・M・ヴァレイ氏の言葉を引用している。最後にヨーロッパの結婚式を分析し A で男＝キリスト＝魂

女＝ 教会 ＝肉体

との等式を導き出し、以下、B、E、F、G、I、N、O、Q、T の項目の一致をあげている。全ヨーロッパを揺るがしてきた様々な変革があったにも関わらず、結婚式は、国王の儀礼

にその起源を持っているとの痕跡を留めているし、その儀礼全体の基盤となっている基本的な理論の痕跡さえも残している、とこの章を結ぶ。

第9章 役職者

第7章 戴冠式での儀礼項目 W である。即ち、役職者の就任式である。何故一章を割いてまで説明すべきか？それは、フィジーの首長の即位式を描くにあたって、女王の即位式（儀礼項目 V か？）と同様な大きな特徴を省略していたからである、という。フィジーの場合、儀式の司祭、土地の首長、大工の長などの役職に空席が有った場合には、ヤナウの首長が即位のカヴァを飲むときに、役職を受ける者もカヴァを飲み、就任する。これらの就任式に関する理論には、直接的な証言はないが、しかし、これは首長の聖職授任式の一部であり、彼らも首長のカヴァを共に飲み、称号も「トゥムボウの神」という、大首長の称号と同種であるという理由から、同じ理論が適用され、小首長は小さな神になると結論出来ようという。インドではより明確に表明されていると思うといい、各役職者に対する例の等式をサタパタやヴェーダなどを引用して分析し、「王は全ての神である。彼は自分の中に、彼の役人や女王が別々に執行している力を結合して持っている」と、王は一柱の神ではなく、複数の神々であったと述べる。同様にエジプト人は、下位の役職者がそれぞれ表象していた神々を、王は自らの中に統合していたと考えていたと記す。カンボジアでは、新王の浄めの後、全役職者は先王から受け取った印璽と権限とを新王に返す。王はその印璽に手を触れてから、すぐに役職者に返す。彼らは役職を一時放棄し、直後に再び印璽を受け取り、もとの役職と称号と職務に新たに就任した。今日でさえ我々の戴冠式には、明確でないところがあるが、「王が冠を受け取るやいなや、英国の貴族たちは、小冠と式帽をつける」。そして「女王が冠を受けるときには、貴婦人たちが小冠をつける」。こうして、我々の貴族たちは、新たに新君主から権限を得る。そのとき、**元来の戴冠式の一部として、王が表象する偉大な神に統合されている小さな神々を表象するものとして、臣下たちを即位させる儀式が含まれているのである。**これを項目 W と呼ぶとする。この教義から、我々西洋人には確固とし、自然で、どんな説明をも必要としない習慣が派生していると考えたくなるが、未開の訓練されていない人たちは、別の方法でそれと同じ目的を達していた筈で、私は役職者たちの持つ神性が、ひとつの手掛かりを提供していると考えたと述べ、フィジー人は通常の司祭と憑依時の司祭とを明確に識別しており、憑依時の司祭は神なのだと述べる。このように聖なる役職者を持つ制度は、何らかの方法で、それまで無かった精神的能力を、地域を問わず人の中に発展させるような教育を施した事になる。もしそうであれば、私が始めに言ったように、慣習の歴史は、人間が新しくより高度な能力を手探りしている歴史であることを示しているのである、とこの章を結ぶ。

第10章 司祭

(現在では司祭とは、キリスト教における司教、司祭、助祭と三つある聖職位階の一つで、一般的には神父という敬称で呼ばれているが)、古い時代やそれほど進んでいない共同体では、**司祭と王を識別する境界線**は不明確で、司祭—王、王—司祭という語を考え出し、両者の区別がつかぬ人物に当てた。近代文明国家ではこの両者の区別は明確なものとなっているが、元々**は一つの属であったものが、二つの種に分化した。この分化の過程が非常に重要であるため、それ以前の王と司祭の持つ類似性を詳細に研究する必要がある、**とこの章をたてる。フィジーでは、選出された司祭は、首長と同じくカヴァを飲む儀礼によってその役職に就任する。首長と司祭の主な違いは、司祭は憑依と予言を行なうのに対して、首長はそれをしないという点にあるが、それは最近二世紀の間に変化したもので、聖なる王権を土台にしている古い宗教には、憑依という現象が全くなかったと信すべき理由があると述べ、それ以上時代を遡っていくと王と司祭を分けるこの主要な基準の一つが見られなくなり、事実いくつかの部族に、最初の首長は誰かと尋ねたら、彼らは司祭が首長であったと答えるであろうと述べる。古代のインドでは、司祭は王よりも聖性が低かったが、両者共に同じ聖職受任式を受けた。この儀式は同じでもその結果は違っていた。両者の違いは、王が供犠の提供者であり、司祭が供犠の執行者である点であったが、司祭側の野望のため、次第に司祭のカストは王侯のカストの上位になった。マヌ法典では「生まれながらに、バラモンだけが神格を持ち、神々でさえある」と言うようになった。

仏典によれば、皇帝と仏陀は共に神々と人間の幸福のために生まれた二つの存在であり、彼らは偉大なる人物という何か漠然とした二つの観念の二つの変種だけけど、共に宗教の領域、世俗の領域に存する未分化の状態から、一方は出家し覚者となり、一方はこの世の快樂や世俗の権威と結びつく皇帝となると、この両者の違いを論じ、次に王者から僧になり覚者になった仏陀の即位式を、第7章の項目に当て嵌め検証している。該当する項目はA・B・E・F・G・I・J・M・O・P・Q・U・V・Wに亘り、この類似性は皇帝(王)と覚者の最後まで見られ、臨終に際し「皇帝の遺骸の如く、救世主の遺骸を扱わねばならぬ」と葬儀、埋葬の詳細まで弟子に言い残す。仏陀と皇帝だけが、丸い塚を作る資格を持つ。仏陀の物語は太陽神話であり、インド人は太陽、月、王、司祭、覚者が類似していると考えていた。次にキリストの伝説群と仏陀のそれとに正確な関係が有るか否かは論じないが、両者には明らかに関係を持っていることは確かであると言い、ヨーロッパにおける司教の聖職受任式を参考に、確立した聖職階級制に組み込まれている成員になされる現実の儀礼を、例の項目別に考察する。その分析によればA・B・C・G・I・K・O・P・Q・Rが該当する。王と司祭が同じ幹を持つ分枝同士であることは明白であり、エジプト研究者は司祭が王から発展したと指摘しているとファラオと司祭の例をあげる。しかし、古代人が君主制を廃棄したとき、王の司祭としての役割はすべて、王—裁判官とか儀礼王と言われる、国事とはいかなる関係も持たぬ役人に委譲された。中世の君主制の支持者たちが、王の司

祭たる性格を再び強調するあたりから始まる、教会と国家との激しい争いを経て、現代になってやっと王と司祭との分離が達成されたが、これはかかるか昔にギリシアとローマが既に到達した地点であるが、しかしその分離は現在でさえなお、一時代のヨーロッパに見られたような王と司祭の古い混同形態に再び戻ろうという傾向があって、完全なものとはなっていない、とこの章を結ぶ。

第11章 敬意の複数形

この章では、第二人称の複数形で人に呼びかけると、どうして敬意を示すことになるのか？また、古代インドでも知られていたが、フランスでは第三人称単数で敬意を示す用法がある。それら敬意を示す複数形と第三人称単数形の各用法及びその起源を説明する仮説を求めている。結論として「上位者たちは本来は複数形で呼びかけられていた。何故なら彼らは多人数と考えられていたか、又は第三者が実際存在していると想定されていたので、多数か第三者として呼びかけられたのであった」とする。敬意を示す複数形が最初に見られるのはパーリ語（上座部仏教経典で主に使用される言語で、使用歴は長く紀元前3世紀から5～6世紀以後までに及ぶ）の文献中の仏陀誕生の物語に散在しているが、その書かれた年代は正確には言えない。古い要素も含んでいるが、紀元前後の要素もあるからであるが、誰に対して使われていたかが重要で、それによると王、仏陀、仏教の僧侶、バラモン修行者、水先案内人の長、父、義理の父、神性を持つ者すべてに対して使われていた。フィジーの司祭は日常生活では、首長たちからは「汝」と呼びかけられるが、彼に憑依した神に首長たちが崇拝の意を示して話しかける時は、「あなた方」になる。敬意の第三人称と複数の分布状態は、それほど詳しく分かっていないが、その分布図は両者が共通の起源を持つという仮説を支持しているという。敬意の第三人称の方が古い用法であり、インドの事例はこの仮説通りであり、又ヘブライ人にはこの敬意の第三人称しか知られていなかったようである。シンハリ人（スリランカに住む多数派の仏教徒で、インド北部から侵入したアーリア系人）は決して「王」とは言わず、常に「王たち」と呼ぶ。インドでは明確であっても、敬意を示す複数形は古代のギリシア人、ローマ人には知られていなかった。西暦4世紀の終わり頃、この複数形が散発的に彼らの言語に入ってきた。イギリス人はローマ人から学んだ。コーランの中には見られないので、アラブ人はビザンチン帝国と接触する段階で知ったのだろう。トンガ人やサモア人は複数形を知らないが、第三人称単数形は知っている。敬意を示す第三人称単数形と複数形の歴史は、まず西アジアの何処かで使われ、この習慣は遠く東方の少なくともポリネシアまで広がっていった。後には神は二人称であるが、王と結合して呼ばれた。これは多分インドで始まり、王や司祭が単なる神の代弁者でなく、徐々に上昇して神となった結果である。敬意を示す複数形はインドから東西へ広がり、第三人称単数よりも混乱の少ない、扱い易い呼びかけ方法として、初期の第三人称単数に取って代わった。しかしこの複数形はあらゆる地域で取って代わった

訳ではなく、ドイツでは両者が融合されて、三人称複数で敬意を表している。この試験的な図式が正しいなら、この二つの敬意の表現方法は、この範囲内の文明が残した連続的な遺産の前後関係を識別しようとするときには重要な助けになるだろう、とこの章を結ぶ。

第12章 イニシエーション

この章では、イニシエーション儀礼と即位式は同一範疇の変種であるという命題を追求し、この儀礼が機能と構造において即位式と顕著な類似性を見せているために、王権の問題を解明するには、イニシエーション儀礼にまで考察を拡げる必要があるとする。

イニシエーション儀礼とは、一般的には、思春期かまたはその時期に成人の生活に若者を導入する儀礼を指している。フィジーにおける秘密結社のイニシエーション儀礼のムバキ儀礼に関して、首長の即位式との共通点を多く見出すとして、戴冠式の項目で分析する。それによるとA・C・F・G・I・J・V・X（即位式儀礼には無かった新しい特徴が、イニシエーション儀礼では見られる＝新入会者は、煤で顔を塗り、水浴の時に洗い落とす）の項目の一致が見られる。さらにフィジーではもう一つ別のイニシエーション儀礼がある。それは割礼で、このイニシエーション儀礼は首長制と結びついており、首長か高貴な人物が死んだときに行なわれる。割礼は新たな死者への供物であり、割礼を受けた者はその時に死んで使者に従うと想像されていたようである。理論的には幾つかの行為を行い、最後に死霊を村に運んで帰ると言われているが、儀式としては、家に閉じこもること、新入会者と成人の間の模擬戦、水浴とその後の祝宴がある。メラネシア文化の西最前線である、**モルッカ諸島**のセラム島の黒パタシワ部族の秘密結社・カキハンのイニシエーション儀礼は、A、C、F、J、K、Q、そして髪切りの儀礼（これはインドではヴェーダの王の聖職受任式の終わりの儀式である）が行われる。インドでは、この儀礼は貴族階級を形成している三つのカストに限定されており、これらのカストは、王、司祭、村長を出す階級であるが故に、イニシエーション儀礼の由来を考える上で非常に重要な点であるとし、A、D、E、F、I、J、P、Q、R、T、U、Vの項目が一致すると分析する。**エレウシス**（古代ギリシアのアテナイに近い小都市）の神秘的儀式での司祭たちの衣服には、国王との関係が見られるとし、本来の王―司祭から究極的には派生しているという。儀礼分析では、A、B、C、E、F、G、H、I、L、O、T、V、Zの一致がある。**古代ペルシア**のミトラ（光の神）教のイニシエーション儀礼は究極的にはヴェーダの儀礼と同じ宗教から派生したものであるが故に我々の議論にとって最も重要なものの一つであるとし、A、B、C、E、F、G、I、N、J、L、O、Q、X、Y、Zとの一致を指摘する。**ニュー・ヘブリデスのバンクス諸島**は、言語がフィジー語と同族で、特に神を示す単語は同じである故に、今回扱っている地域から外れてはいないとし、**タマテ結社**のイニシエーション儀礼の分析をし、A、B、C、E、F、O、X、Y、Zの一致を示す。**トレス海峡諸島**は、メラネシアの端にあるが、その文化は部分的にニューギニアの影響を受けていると言い、B、C、D、F、J、Vの一致を示す。

南東オーストラリアのクルナイ族の習慣を解剖し、A、B、C、D、E、F、G、H、J、O、U、V、X、Yの一致を指摘し、最も原始的だと想定される部族においてさえ、我々が既に見てきた戴冠式との完全な一致がある。ここでは秘儀を受けた者たちは、バンクス島のように死者の霊を表象するのではなく、祖先一神を表象している。これは、フィジーの首長が表象している祖先一神と同じものであるという。アフリカ・ケニア植民地のキプシキ部族の割礼儀式は、A、B、C、F、G、I、J、K、O、V、Yの一致があり、このタイプのイニシエーション儀礼では、割礼が中心でインドの戴冠式では、中心は浄めの儀式であり、バラモンの儀礼では、撚り糸をつけるのが中心となり、この三儀式とも太陽に向かって執行されるという。アフリカの部族、ルアンダ族のイマンドアの秘密結社について分析し、A、B、C、E、F、G、I、J、O、Q、R、T、V、X、Y、Zの一致を示し、このルアンダの儀礼の重要性は、彼らが明らかに王権とイニシエーション儀礼を結合させていることであると指摘し、ここにルアンダの儀礼が、戴冠式以外の何ものでもない結論づける。

次に、戴冠式、聖職受任式、イニシエーション儀礼、即位式の派生関係を論じている。

戴冠式と聖職受任式との関係は、王と司祭の関係が非常に密接なので、明白に両者が共に共通の起源を持っており、イニシエーション儀礼との関係より密接であるが、注意深く分析すると、その近親性は明らかにあり、その時には戴冠式と聖職受任式とを、イニシエーション儀礼の亜種として括ることが出来るという。では即位式とイニシエーション儀礼との関係は？一方が他方から派生したのか？もしそうなら、どちらが派生したのか？

そこで言語学者の例に倣い、まずイニシエーション儀礼から即位式が派生し得るかを検討を始める。ルアンダのイニシエーション儀礼の例、キプシキの新入会者の儀式の例、インドの王の浄めの儀式の例をあげ、これらのすべての儀礼は理論的には、王=太陽=神の等式から発しているが、この基本的な等式は、未開人のイニシエーション儀礼には欠けている。それ故・・・と考察を重ね、その結果「イニシエーション儀礼が即位式から派生した」という仮説の方がより良く説明し得ると、ルアンダ族のイニシエーション儀礼がこの派生過程を暗示しているという。次にもしイニシエーション儀礼が即位式から派生したとしたら、即位式は最初に何処で起こったのか？また民衆的な形態は世界的に見て何処から拡がって行ったのだろうか？と問いかけ、最初に語った収斂について思い出そうと言う。

「今や聖なる王権は広い地域に行き渡り、我々が本書で扱っている範囲をはるかに超えている。他方、儀礼の通俗化はあらゆる場所で止むことなく進行している。新しい習慣や考えは、王、司祭、教授、商人といった指導者から始まり、民衆へと拡がっていく。国王の儀礼は常にこの民衆化の運命にさらされてきた筈であり、その結果としてある種のイニシエーション儀礼へと不可避免的に変化していったのである」、とイニシエーション儀礼は即位式の民衆化した形態であり、全体的に退化した形であるということになる、と結論付ける。単なる提案であるがと断り、この三つの種、または亜種の進行過程は次のように表されるのが最適であろうと述べる。

イニシエーション

即位式 任命式
 戴冠式

最後に、キリスト教のミサ（カトリック教会で行われる聖体祭儀で、司祭が執り行い信徒が参加する、最も重要な典礼儀式である）について考えてみようとの章を結ぶ。

賛美歌を引用して、A、B、E、F、G、J、K、L、T、V、Y の項目の一致をあげる。

P・S—古代のインド人は明らかに太陽の再生を信じていた。サタパタは、太陽は夜一胎児となり、日の出のときには太陽—子供となっていると言っている。

第13章 神の徴し

この章では、人間と神とを識別する徴しは幾つかあると紹介している。神々の神性を知る方法であり、それは「汗をかかず、まばたきをせず、汚れのない新しい花輪をかぶり、大地に触れぬ」ことであるという。それらは全て太陽—王・太陽—神の関係に帰着する。

- 「空中に留まっていられる力は、神の徴しであった」。確かに、大空に浮かぶ太陽と空中に浮かぶ人間との間に、インド世界の人々は類似性を認めていた。
- 「王が大地に触れてはならぬ」という規則はかなり広まっている。『金枝篇』の中で（第60章 天と地の間 — 地に触らぬこと）フレイザーは、その例をメキシコのザポテック族や、日本（ミカドにとって、足を地に触れることは恥すべき墮落であった。事実、第十六世紀には、そのことが彼の位を剥奪するに十分な理由になった。ミカドは宮廷の外では人々の肩によって運ばれた。宮廷内では豪華な敷物の上を歩いた。= 16世紀に在位する天皇は、後柏原・後奈良・正親町・後陽成天皇だが、崩御後でなく讓位で即位したのは後陽成1人だから正親町天皇が該当する。その裏には秀吉の思惑があり、秀吉は讓位直後関白・太政大臣になっている）、シャム、ペルシア、ウガンダから取っている。以下タヒチの例をあげ、タヒチでは、王は歩かずに飛んでいた。これは彼が天空の太陽であることから導かれた論理的な帰結であった、と記している。
- 「まばたきをしないという特性は・・・」、この特性も同様に「眼と人間という小宇宙との関係は太陽と宇宙との関係と同じで、それ故、太陽は日の眼、空の眼として、フィジーからギリシアまで普遍的に語られている」と記す。
- 「汗をかかず」という点に関しては、述べられていないが、前項のなかで、自身の経験を述べ、そのまばたきをしない人物を発見したとき、彼がことによったら汗をかかないかどうか、彼の皮膚を調べてみようとはまでは考えが及ばなかった。今となってはその点については何とも言えない、と述べている。
- 「新鮮で汚れのない花輪」の問題が残っているが、何かの糸口が見つかるまでは、解明の見通しはつかない、との章を結ぶ。

P・S-のなかで「汚れない」ことに関しては、『リグ・ヴェーダ』三十五・＝参照。

「汝のこれらの道は、サヴィトリよ、古く、汚れがなく、大氣中に見事に作られた」。

サヴィトリは、太陽＝神の一形態である、と追記している。

以上が第6章から第13章までの儀礼に関する概要である。王権を支えるそれぞれの儀礼、現象の由来を考察していくと、太陽＝神＝王に行き着き、これは考察する全地域において、基本的に共通する観念であったことを証明しているようである。

【考察】 わが国の即位式 (今上天皇の例)

昭和64年1月7日、昭和天皇崩御の僅か3時間半後の午前10時1分、国事行為として皇居・宮殿「松の間」で、「剣璽等継承の儀」が行われ、剣璽＝剣と曲玉（まがたま）＝と国璽（国の印）御璽（天皇の印）が新天皇陛下に伝達された。同午後新元号を「平成」に改める政令に署名され、翌8日から「平成元年」となった。翌9日に「即位後朝見の儀」が行われた。皇位継承儀礼は、翌平成2年11月12日から皇居・賢所で「即位礼・大前の儀」、国事行為で皇居・宮殿で「即位礼正殿の儀」、「祝賀御列の儀」が宮殿～赤坂御所間で、引き続き15日まで「饗宴の儀」が宮殿で行われた。即位儀式で重要とされるのは、皇位を継承する「踐祚（せんそ）」と即位を対外的に宣伝する「即位式」、そして宗教色の濃い「大嘗祭」である。「大嘗祭」は国事行為になじまない性格の儀式であるが故に、皇室の行事として11月22日「大嘗宮の儀・悠紀殿共饗の儀」、翌23日「大嘗宮の儀・主基殿共饗の儀」が皇居・東御苑で行われた。（延喜式によれば、天皇の即位がその年の7月以前の場合はその年に、8月以降の場合には翌年に行われることになっていた）。後、大饗の儀あり。

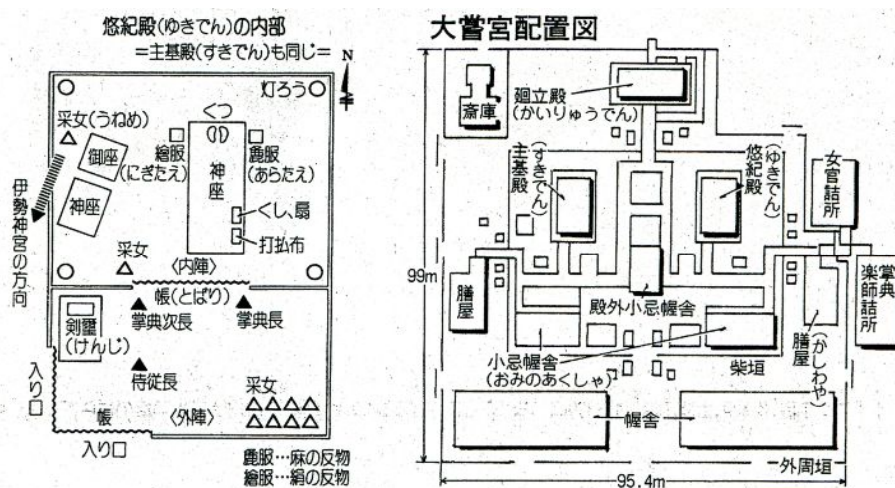


図1 大嘗宮配置図と悠紀殿・主基殿の内部図

皇居・東御苑に設けられた大嘗宮の施設は、祭りの7日前から造り始め、5日以内に造り終える。メインの悠紀殿・主基殿はカラマツの原木や畳表で出来た古代そのままの建物。

今上天皇が取り行った儀式

● 剣璽等継承の儀（踐祚の儀）

首相ら三権の長、閣僚が三列に並んで待ち受ける中、式部官長の先導で、モーニング姿に喪章を付けた新天皇陛下がまっすぐ前を見据え、ゆっくりとした足取りで松の間に入られる。古代紫の地に金色の糸で大王松（だいおうしょう）を織り出した大ついたてが置かれ、その前には白い敷物の中央に、白い背もたれの天皇の儀式用いすが置かれ、新天皇がその前に立たれると剣と璽を捧げ持った侍従が松の間へ。剣は陛下に向かって右、璽は左側の案（あん）と呼ばれる白木の机にうやうやしく置かれる。次いで紫色の布に包まれた国璽、御璽が中央の案に置かれ、伝達された。新天皇は首相らの挨拶を受けて一礼された後、侍従の捧げ持つ剣と璽に続いてゆっくりと退出された。儀式は始終無言の中で、わずか4分で終わる。

● 即位後朝見の儀

新天皇、皇后両陛下が皇族方を従えて皇居・松の間へ。首相ら三権の長や閣僚など国民の代表 243 人に正式に会われ、天皇としての初のお言葉を述べる。首相が代表として新陛下への期待をこめて挨拶。約7分で終わる。本来は「踐祚後朝見の儀」だが、今回政府はこの儀式を国事行為として行うことから「踐祚」の代わりに「即位」とした。

● 即位礼正殿の儀

即位の礼のメイン儀式で、天皇だけが着る黄櫨染袍（こうろぜんのはう）の束帯に身を包んだ天皇陛下、次いで十二単の皇后さまが宮殿・松の間に姿を現す。松の間中央の高御座（たかみくら）に上る陛下。皇后さまは隣の御帳台（みちょうだい）へ。天皇陛下の傍らには三種の神器の剣と璽（じ=まがたま）が置かれる。外国賓客・国会議員・各界代表ら約 2,500 人が起立して見守る中、天皇陛下が即位を宣言するお言葉を述べられ、首相が即位を祝う寿詞（よごと）を述べた後、万歳を三唱し、約 30 分で儀式は終わる。高御座は京都御所から空輸後、補修された。

● 祝賀御列の儀

正殿の儀を済ませた両陛下は、燕尾服などの洋装に着替え、皇居の宮殿から赤坂御所まで約 4、5 kmパレードされる。皇太子さまが従われ、首相・宮内庁長官らも車列に加わる。

● 饗宴の儀

即位を祝う披露宴。主に外国元首ら約 350 人を宮殿・豊明殿に集めて一回目があり、後三日間計 7 回約 3,500 人が招かれる。食事はいずれも和食。

● 大嘗宮の儀

皇居・東御苑に造られた大嘗宮（間口 95m、奥行き 99m）で、夜から翌未明にかけて行われる。

● 悠紀殿共饗の儀

純白の祭服姿の天皇陛下が廻立殿から前後に剣璽を持つ侍従らを従え、悠紀殿に着く。午後六時半、儀式はここから始まる。内陣には中央に神座、その傍らに伊勢神宮の方

角を向き、陛下の坐る御座と一回り小さい神座が設けられている。陛下が采女の助けで秋田県から収穫された新穀、白酒、黒酒、果物、調理したタイなど神饌を神座わきに自らお供えする。拝礼の後、お告げ文を述べ、新穀とお酒を召し上がる。午後九時過ぎ終了。(宮内庁はその趣旨を「陛下が新穀を神々に供えて自らも食べ、国家の平安と五穀豊穰を祈る儀式」とし、天皇と神との「一体化説」を否定する)。

● **主基殿共饌の儀**

深夜零時半から同三時すぎまで、大分県の新穀を使い悠紀殿と全く同じ儀式を行う。参列者は首相はじめ約 900 人。

● **大饗の儀**

大嘗祭参列者をもてなす宴会で、二日間計三回、豊明殿で行われる。 **儀式は以上。**

ホカートの言う項目と、今回の「即位の儀礼」がどれほど類似しているか比較してみた。

A? (ある時代には有ったかも? また発表されていないが、行われている可能性は高い)。

C、悠紀殿・主基殿での共饌の儀は見せてもらえない。

D、剣璽等継承の儀は、始終無言の中で行われる。

G、神饌 (悠紀殿・主基殿での共饌の儀)

I? 天皇だけが着る黄櫨染袍 (こうろぜんのほう) の束帯が該当しないか?

また、悠紀殿の中での儀式は長時間であり、説明されている儀式以外に有りそう。

J、純白の祭服姿の天皇陛下が廻立殿から出て来られるが、着服の前に小忌御湯 (オミノオニュ) をされている可能性が高い。

M、即位礼正殿の儀で、参列者は万歳三唱をする。

N、饗宴の儀・大饗の儀がある。

Q、剣璽等継承の儀がある。

R、即位礼正殿の儀で、天皇は高御座に上がる。

S? (東側にある悠紀殿から西側の主基殿に移られる。太陽の運行を意識している?)。

U、「天皇」の称号を受ける。逝去後は諡号を受ける。

V、即位礼正殿の儀では、共に儀礼を受ける。

Z、剣璽等継承の儀・即位後朝見の儀・即位礼正殿の儀・大嘗宮の儀と、天皇は数回にわたって少しずつ王権を付着させてゆく。

こうして見ると、「天皇の即位儀礼」には、該当している項目が結構多く有るように思われる。

引用・参考文献

●金枝篇	J・フレイザー	永橋 卓介訳	岩波文庫	1971 版
●天皇	児玉幸多		東京堂出版	1993
●司祭・ミサ・パーリ語・他	フリー百科事典『Wikipedia』			
●今上天皇即位式次第	中国新聞記事		中国新聞社	1989